

# 県南思考 Vol.4

## 特集：廃校を考える

南房総がかかる問題にせまり、千葉県政の現状をわかりやすくレポートする、それが「県南思考」です。南房総選出のふたりの県会議員、木下けいじと亀田いくおが毎号、テーマを変えて問題の本質にとことん迫ります。今回は廃校がメインテーマ。かってはにぎやかな子どもたちの声があふれていた学校が次々と廃校に追い込まれています。ガランとした校舎ほど寂しいものはありません。背景にある児童の減少、市町村の合併など教育の現状を探り、さらには廃校になった施設の有効活用、地域活性化への道を探ります。まずは、小学校の校舎を利用して作られた体験型宿泊施設「くすの木（南房総市和田町上三原）」の訪問からレポートはスタートします。

南房総市和田町上三原・発

### 「くすの木の可能性」



## 特集：廃校を考える

結びの対論 木下県議 × 亀田県議

たとえば高齢者福祉施設のような、建物がそのまま使って、しかも地域住民の皆さん役にも立つ。  
そんな活用プランを考えられないでしょうか。

**木下** 今日、丸一日動いて廃校をテーマに多くの人にお話を伺ってきたわけですが、実は私の母校にも統合が持ちあがっているんですよ。

**亀田** たしか、小学校は千倉でしたね。

**木下** 千倉の忽戸小学校です。近隣校との合併話が具体化してしまって、いま統合するか、されるか微妙なタイミングなので、今日、廃校を受け入れた地域住民の皆さんのお話はひとごとではありませんでした。

**亀田** 学校というものは我々にとって極めて思い入れの深い、特殊などころですからね。学校はただの施設ではないし、校舎はただの建物ではない。

**木下** 遊んだり、ケンカしたり、先生に怒られたり。それこそ新しいランドセルを背負って弾むように校門をくぐった日からの思い出がたくさんつまっている。

**亀田** いまでも母校とは縁が深くて、それは我々にとって大切な選挙の投票場所という意味もあるんですが（笑）、県会議員として、入学式、卒業式、運動会など、さまざまな行事に招かれる機会が多い。校舎へ足を踏み入れたたびに、幼かった頃の時間と思い出がよみがえって、胸の奥が熱くなりますね。

**木下** そうした思い出のつまつた母校が廃校になるということは、地域の方にとって重いものがあるだろうなとは容易に想像ができます。ただ、現実問題として長谷川教育長が説明されていたように、児童数の減少という大きな流れにはあらがいきれない。

**亀田** となると、いかに地域の皆さんが納得していく形で、活用の方向性を探っていくかということになりますね。

**木下** 学校というものを器として考えると、なかなか有用な建物ではあるんですね。まず敷地の広さがあげられる。広い玄関があって、教室があって、体育館や講堂がついて、しかも水道や下水などのインフラが充実している。

**亀田** そうした規模を生かした活用となると、ひとつには「くすの木」で見てきたような体験学習的な施設が可能としてあげられますね。南房総は海にも山にも恵まれた自然豊かなところです。その環境をいかして都会から子どもたちを招いて利用してもらおう。海で実際に見えた生物を施設に戻ってから教室で勉強する。あるいはインターネットで調べる。

**木下** 田んぼで田植えをしたり、畑を耕してもいいし、虫やさまざまなもの山の生物を観察する機会にもこかきませんからね。

**亀田** 教室と、実験できる自然そのものが近距離で用意されている。こうした環境は都会の子どもたちにとって、また指導する立場の方々にとってもかなり魅力的に映るのではないかと思う。

### 決してなくしてはいけない場所

**木下** 私は今日、この問題を考えてきて、廃校というものは高齢者の福祉施設にピッタリではないかと思ったんです。教室をパーティションで区切ればお年寄りたちの居室もできる。

**亀田** たしかに、広い玄関ホール、水道など基本的な要素はすでに整っている。体育館をリハビリ用のスペースにすれば、広いところで思いきりできる。もともとマイクなどが整備されているわけですから、お年寄りたちのためのリクリエーションを行うのも簡単ですね。

**木下** いま、都心の介護施設などでは古い社員寮やマンションを改造して開設しているケースもあるでしょう。それに比べたら、廃校を利用した方が、はるかに現実的ですね。しかも使い勝手がいい。スペースにゆとりがありますから、例えば、中心的な機能は既存の施設にもたせて、お年寄りの居室だけを新築するといった考え方でもできる。

**亀田** 防災の点から、お年寄りを宿泊させることに規制があるとうなら、デイサービスという形だけでスタートするという考え方もありますね。広い体育館でリハビリをしたりゲームを楽しんで、教室をリフォームした部屋で休んでいただいて、お昼はデリバリーのサービスを利用すれば、すぐにでも実現できる。

**木下** 地域の方にとってもメリットがあるはずです。介護の問題は誰でも必ず直面していく問題です。いま自分が住んでいる地域にそうした高齢者向けの施設があれば、いつでも利用できるので安心でしょう。

**亀田** いずれにしてもこの問題は地域の人たちの声を尊重して進めいかなければなりません。「くすの木」では愛校精神が形を変えながら、しっかりと施設を支えている。皆さんが愛着を持って、地域の精神的な支柱として慕われる施設を考えていく必要がありますね。

**木下** 学校は、単なる建物や施設ではありません。皆さんの歴史と記憶が蓄積した共通の思い出の場所、なくなつていいわけがないし、決してなくしてはいけない場所。今日はそのことを、あらためて痛感しました。



木下 敬二（きしょた けいじ）  
南房総市・安房郡選出  
昭和 23 年 5 月 17 日生まれ  
事務所 / 〒295-0005  
南房総市千倉町牧田 164-1  
TEL : 0470-44-4111  
FAX : 0470-44-4112  
<http://kishita.awa.jp/>  
e-mail : kishita@awa.or.jp

県南思考 Vol.4  
南の風を県政に。南房総選出の県議による「県南思考」は市民の皆さんとともに、県南のあるべき姿を追い求めています。  
本紙をお読みになった感想、ご要望、その他ご意見は各県議の事務所までお気軽にお寄せください。  
発行 : 2009 年 9 月 5 日  
編集 : 「県南思考」編集委員会  
デザイン : 野村友紀



亀田 郁夫（かめだいくお）  
鶴川市選出  
昭和 27 年 2 月 16 日生まれ  
事務所 / 〒296-0041  
鶴川市東町 665  
TEL : 04-7099-0190  
FAX : 04-7099-0191  
<http://www.kameda190.com/>  
e-mail : ikuo-k@leaf.ocn.ne.jp

と、客層もさまざままで、ピークとなる夏休みなどは予約をとるのが難しくなるほど。最新のデータでは宿泊客、体験利用、その他を合わせて年間に約13,000人も利用客を集めるほど順調に稼働しています。



夏休みになるとクラブ活動の合宿として利用されるケースが増える

もちろん、外から利用者を迎えるだけでなく地域の方々も積極的に利用し、卒業生の同窓会、クラス会はもちろん、結婚式、老人会の会合、法事、月見会など、四季を通じてにぎやかな声が絶えることはありません。

豊かな自然、豊富な体験メニュー、それらを支えるスタッフの熱意。

「単純に仕事として割り切ったら、こんなに一生懸命にはならないでしょう。やはり、自分たちが学んだ母校ですし、そこで働く歓びを感じているからでしょうね」と、語る北見さん。

授業そのものは行われなくなりましたが、「くすの木」、旧上三原小学校は引き続き、地域の皆さん的心のよりどころとして、どっしりと暮らしの中心に生き続けているようです。



#### 自然の宿 くすの木

●連絡先  
〒299-2727  
千葉県南房総市和田町上三原 1244-1  
TEL: 0470-47-5522 / FAX: 0470-47-5560  
<http://www.mbosso-ekoto.jp/kusunoki/>

●利用料金	一般 (中学生以上)	小学生	小学生未満
宿泊のみ	3,150円	2,100円	2,100円
1泊2食	5,250円	4,200円	3,150円

●主な体験メニュー（詳しくは直接お問い合わせください）  
ハイキング／サイクリング／小物細工／竹細工／わら細工／陶芸体験／格農／納豆づくり／田舎寿司づくり／シタケの剥打ち／水桶／星の観察／野菜収穫／餅つき／リースづくり／その他

## Pin Point インタビュー

### 教育長におたずねします。

鴨川市教育委員会 教育長 長谷川孝夫氏

相次ぐ廃校に行政はどのような対策を講じているのでしょうか。鴨川市天津にある鴨川市の教育委員会をお尋ねし、教育長の長谷川氏におはなしを伺いました。

小学校、中学校の廃校が続いている。その背景には何があるのでしょうか。

大きな理由として生徒数の減少があげられます。同じ千葉県でも県北は生徒数、学校数ともに増えているのですが、県南では20年前に比べて生徒数がおよそ半分に減っています（グラフ参照）。当然、ひとつの学校、あるいは1学級の生徒数も減ってきます。ただ、教育委員会としては、単純に生徒数が減ったから効率を考え機械的に統合しているわけではありません。これまでの事例研究によって、教育はある程度の人数が集まった集団の中で、お互いに学びあって行なわれることが望ましいと報告されています。あまり少人数で、たとえばひとつの学級で1年生が国語を学び、同時に2年生が算数を学ぶといった「複式学級」状態は、できれば避けたい。そこで、ある程度の基準を下回ったらひとつにして、1クラスの人数を維持していく。つまり、統合というものを、将来を見通した上でよりよい教育環境を実現するための積極策ととらえているんです。



よりよい教育環境といえば、小中一貫教育を掲げた長狭学園もスタートしました。

長狭学園は、学区内の主基、吉尾、大山の3つの小学校と長狭中学校を統合し、小中あわせて9年の一貫教育校として本年4月に開校しました。これまで私立では類例がみられましたが、県下の公立としては初めての試みです。より充実した教育環境の実現を目的に掲げていることはもちろんですが、もうひとつの側面として不登校や学習不適応などの「中1ギャップ」の問題もあります。いわゆる不登校の実態を調べてみると小学校では、まだそれほどの数ではないですが、中学になると約8倍へと激増する。理由はいろいろ挙げられます。子どもから大人になる春学期という微妙な時期、友人、教員との人間関係が複雑になる、勉強も難しくなる。また、それまでの担任制から教科担任制に変わることで、なにか先生に突きはなされたような印象を生徒たちが持ってしまうといった弊害も考えられます。そうした、小学校と中学校とを隔てている大きな壁をなくそうという



（左から）亀田県議、木下県議、長谷川教育長

狙いもあって今回の統合に踏み切ったわけなんです。利点としては教科によって小・中の先生がチームを組んで教えることがあげられます。小学校のきめ細かな生徒指導を中学校の生徒にも適用するといった実践を経て小中一体となって、地域の子どもは地域が責任をもって育てる教育環境を作りあげたいと考えています。

しかし現実問題として、そうした統合の結果、校舎は余っていくことになりますね。

小学校の校舎だけではなく、鴨川中学校と江見中学校が統合し、新しい中学校の新設計画が進んでいますから、それらの校舎の利用法も考えなければなりません。この問題については市や教育委員会だけで決められるものではありません。なんといっても学校というものは地域の方にとって格別、思いの入った場所です。したがって、廃校利用についても、地域住民の皆さんと一緒に考えていく方針を打ち立てています。使われなくなつた校舎がすぐに他の施設に転用できるかというと、耐震の問題ひとつとっても難しいケースもありますが、市としてはすでにプロジェクトチームを立ち上げ、活用プランの検討に入っています。たとえば南房総の立地を生かし、都会の子どもたちを迎え入れ、海や山で思いきり遊びながら学んでいく少年少女の自然の家といった方向もアイデアとしてはおもしろいかもしれません。いずれにしても、なんとか形あるものとして残していく、それを市の基本スタンスとして早急に取り組んでいかないと考えています。



2009年4月に開校した鴨川市の長狭学園



## 南房総市和田町上三原・発 「くすの木の可能性」

姿は変えても母校であることには変わりはない。  
廃校が地域の新しい拠点になった。



## アイデアを寄せあって 活用法を模索

目にしみるような緑に包まれた南房総市和田町上三原。

この町で122年という長い歴史を刻んできた上三原小学校が廃校になったのは平成7年のことでした。

「たまたまこの地区は1行政区にひとつの小学校があるという、県南でも類を見ないエリアだったんですが、児童数の減少という現実があり、北三原小学校との統合が決まって、惜しまれながら廃校に至つたんです」と、施設長の北見さん。

廃校そのものはやむを得ないと受け入れたものの、なんといっても小学校は数多くの卒業生を送ってきた地域のよりも多くあります。建物や施設を利用し、地域の拠点として生かす方法はないだろうか。

そんな声がまきおこり、町、地域住民、外部のアドバイザーなどが協議を繰り返

した結果、体験型宿泊施設として再生させるプランが具体化。

校舎をかかえるようにそびえ、地域のシンボルとして上三原の人たちに親しまれてきた樹齢750年といわれる巨大な樟の木にちなんで施設名がつけられ、平成9年12月に「くすの木」がオープンしたのです。

## 上三原を味わいつくす 体験メニューの数々

開設にあたっては、宿泊客を迎えるために校舎をリニューアルして客室や浴室を整備する一方で、集会所やさまざまな活動のスペースとして活用するために、講堂はほとんど手つかずのまま保存しました。

発足にあたって打ち出されたのが四季折々の体験型メニューを充実させること。「ただお客様を呼んで、安い値段で泊まっていたくだだけでは民宿やユースホ

ステルとほとんど変わらない。上三原は自然の宝庫です。その自然の中で、長い歴史の中できまざまな習みがあり、暮らしを支える知恵や楽しみが育まれてきました。そうしたことを体験することで、外からいらした方々に上三原という土地そのものを味わっていただきたい、そんな思いをこめたんです」

もともと、このあたりは「竹ノ中」といい、地名の通り竹林に囲まれたところ。その豊富な竹材を使った竹細工教室をはじめ、広い講堂を使った陶芸教室や近所の農家の協力をあおいで行われている稲作や畑の農業体験。なかには納豆づくりや田舎寿司づくりといっためずらしいメニューも

あり、訪れた人を喜ばせています。

出される料理に人気があるのも「くすの木」の特長。基本的に食材は地元産のものを使い、朝、煙でとれた新鮮な野菜が食卓へ並びます。調理するのはもちろん近隣の主婦の皆さんで、「贅沢な料理はできません。素朴な味ですが、野菜のてんぷらなど、食材本来の味をひき出して、ふだんから私たちが暮らしの中でなじんできたものをお出しするようになっています」

その料理が評判を呼んで、最近は宿泊客に出て朝夕食だけでなく、お昼のランチバイキングも人気を集めているようになりました。

これは古くからこのあたりで農家の方たちが集会を行うときに、それぞれ得意料理を持ち寄って集まった「提げ重」という風習にヒントを得てスタートしたもので、テーブルの上に20種類ほどの和風の料理を用意。これを「好きなだけうぞ」というバイキングスタイルで始めたところ、最近はこのランチだけを目当てにした日帰りのツアーが実施されるほどのにぎわいを見せています。

## 地域の中で母校は いつまでも生き続ける

施設の運営や体験メニューの企画、実行などは、すべて地域の住民自身の手によって行われ、「地区をあげてゲストを迎える」と、意欲的に取り組んでいます。

そうしたきめ細かなサービスが評判を呼んで、リピーター客が急増。

子ども会の旅行、少年野球の合宿、家族連れ



地元でとれた食材を地元の方々が心をこめて調理



「くすの木」の施設長、北見氏。ご自身も上三原小学校の卒業生